



**“いま”を生きる×“これから”を**

**生きぬく力を育む保育**

**～多様なステキと向かい合う子供たち～**

## 目次



事例カードの見方



- ◇ お家どこなんや？（3歳）
- ◇ ミミズ、ふまれちゃう（5歳）
- ◇ カエルを逃がす！（5歳）



- ◇ あれやん！つくれるで（4歳）
- ◇ ごみって…（架け橋期6月）



- ◇ トマトちゃんといっしょに（3歳）
- ◇ ピーマンは苦手でも…（4歳）
- ◇ わたしもやりたい（4歳）
- ◇ カエルのはこ（4歳）
- ◇ 齧られたピーマンどうする？（5歳）



- ◇ だってこのお花が好きだから（4歳）
- ◇ チョウさん、しんじゃう（4歳）
- ◇ わたしの食べごろ（5歳）



- ◇ 友達と楽しみたい（4歳）
- ◇ アブラムシどこにおるん？（5歳）
- ◇ どうやって採る？（5歳）
- ◇ セミ…どうしよう（5歳）
- ◇ 友達と一緒に身体を動かすことについて  
（架け橋期9月）



- ◇ やっぱり着替えるわ（3歳）
- ◇ まだ、追いつけへんからな（5歳）
- ◇ 見て、こんなに汚れた（5歳）

# SDGs 5つのP

# 幼稚園アイコン

# 保育エピソード



## 保育エピソード

# トマトちゃんといっしょに

3歳児I期5月

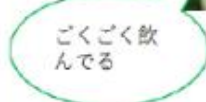
3歳児が気持ちを寄せる姿から



おはよ!



お水おいしいか?



ごくごく飲んでる



お花見せてあげる

水やりをしながら「おはよ!」「ごくごく飲んでる～」「お水おいしいか?」など自分の言いたいことを話しかけたり、摘んできた花や、砂のご飯をトマト苗の所に置いたりする姿もありました。葉っぱが黄色くなったので私が「元気になって」と言いながら肥料をあげているのを、子供たちが見ていました。すると、肥料が砂と同じように見えたのか、砂場から砂を取ってきて、トマト苗の周りに蒔き始めることもありました。トマトのためにいいと思うことをしてあげたい、そんな子供の思いが伝わってくる出来事でした。

## 考察

“栽培”というと収穫を目的とするのですが、3歳児はトマトが生長していく過程でその時感じたことを呟いたり、育てていく中で気づきを思わず言いたくなったりするなど、トマトがまるで仲良しであるかのように気持ちを寄せる姿がたくさんありました。

## 考察

## 未来にフォーカス!!

相手は“人”ではなく“トマト”ではありますが、子供にとってはお友達のような存在。自分なりに気持ちを寄せ、相手のために何かしてあげられることはないかなと、対象を愛おしむ経験は、将来お互いを大事に思い尊重し合う共生へとつながっていきます。こんな心温まる出来事の積み重ねが将来“平和”へとつながっていきそうです。

## 未来にフォーカス!



- ◇ お家どこなんや？（3歳）
- ◇ ミミズ、ふまれちゃう（5歳）
- ◇ カエルを逃がす！（5歳）

生き物をみたり・ふれたり  
変わっていくのに気づいたり  
生きてるなって感じたり  
死ってなんだろうって思ったり  
自然の不思議に触れたり  
なんで？って疑問をもったり

～幼児期の子ども達は虫や小さな生き物に出会い、草花に触れて遊ぶ中で様々なことを感じたり、考えたりしています。

身近な環境の中にもこそ、命があること、循環していることに気持ちを寄せられるように～

# お家どこなんや？

幼虫との驚きの出会いから

## 考察

## 保育エピソード

花壇のお花に水やりをしていると目の前にプリプリと太った幼虫が現れました。子供たちも私も驚いて「さっきまでいなかったのに！」「これは何なんや！！」と口々に話しています。

触って確かめようとする子、「お家どこなんやろ…」という子、お家のつもりで幼虫にスコップをかぶせて「これで大丈夫」と言う子…。周りの子供たちも「そやな」と頷いています。私は虫が心配でしたが、幼虫のためにと、子供たちなりに、いろいろ考えていたようでした。

見ていた子供が幼虫をすくって花壇に戻すと、幼虫があっという間に、土の中に潜って行くではありませんか。「え～！！」「すごいな！潜っていったで！」「ここがお家やったんか～」と子供たちは次々と言葉にします。私も虫の動きに驚かされました。幼虫が見えなくなった後も、土が動いていたので、みんなでじっと見つめていました。私も、子供たちも一緒にホッとして「お家見つかってよかったよね」と、幼虫への思いを共有した出来事でした。

虫との出会いは日常的によくありますが、この幼虫の思いもかけない動きは、子供たちの目をくぎ付けにしました。“生きている！”ということを感じたようです。

土の中に潜って行く幼虫の力強さ、お家はここなのか！という子供たちの素直な驚きや感動を引き出す自然の凄さを感じました。

教師自らも豊かな感性で子供たちと響き合う保育を大切にしていきたいと思います。

## 未来にフォーカス！！

力強く土の中を潜っていく幼虫の動きは、生きている命を強く感じさせるものでした。小さな命に向き合ったこの経験は自然に親しみ畏敬の念を抱き、ひいては地球上の様々な命との共生を考えることにつながっていくのではないのでしょうか。

いのち



これは何なんや？

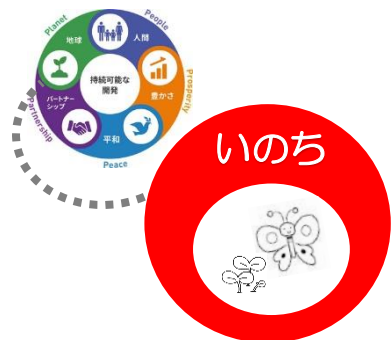


ここが家やったんか～！



# ミミズ、ふまれちゃう

## 保育エピソード



園庭のコンクリートの道にミミズがいるのを見つけ、「ふまれちゃうね」と呟いたA児。ミミズが弱っているような状態に見えたので、私は、棒のようなもので踏まれないうちに動かすといいなと思いました。しかし、A児は、三角コーンを4つ運んできて、ミミズの周りにコーンを置き、「こうしておけば踏まれないうね」と言いました。そして、「でもこの間（コーンとコーン）はどうしよう…」と言いながら、持っていた虫捕り網をコーンにかぶせ、反対のコーンの穴に網の持ち手の方を差し込もうとしていました。その様子を見ていたB児が「土のところに連れて行ったほうがいいんじゃない？」と言いながらも同じように自分が持っていた虫捕り網を渡し棒にしました。踏んでしまう側の私たちの行動を制限し、注意を呼び掛ける目的で、コーンを置いたA児の姿にハッとさせられました。

いのちに心が揺り動かされて

## 考察

ミミズを土があるところに運んであげるのがよかったのかもしれませんが、A児は、ミミズがここにいることを尊重し、踏まれないうちにと、自分にできることを考えて行動していました。また、ミミズが弱っているような状態であったことを感じ、そっとこのままにしておいた方がよいと考えたのかもしれませんが。

いま、ここで生きているミミズの命を何とかしようという思いは、A児もB児も同じで、それぞれに心が揺り動かされた行動だったと思います。

## 未来にフォーカス！！

幼児期に生き物に触れたり、観察したり、飼育したりしながら、思いを寄せ、いのちを感じていく体験は、相手の立場にたち、自分ごととして考えたり、自分にできることを考えたりして、互いの存在を尊重しながら生きていくことにつながります。



# カエルを逃がす！

A児のカエルへのまなざし

## 保育エピソード

## 考察



「カエルを逃がす」とA児が宣言するように言いながら、飼育ケースを持って園庭へ走って行きました。10日程前に友達と一緒に見つけて捕まえ、カエルのために飼育ケースの中も設えて飼っていたので、どんな風に逃がすのだろうと気になりついて行くことにしました。藤棚の側でケースからカエルを取り出していると、他児が「何やってるの？」と様子を見に来ました。A児は「カエル逃がしてるねん」と言いつつ、視線はカエルを追ったままです。カエルがどنگり広場の方へ跳んでいくのを見て「あーそっち行ったら草とかないしな…」と言いながら、カエルの後を中腰になったままついていきます。途中、テントウムシを見つけると、手で素早く捕まえ、「テントウムシ食べるかな？」と言い、カエルに近づけますが、カエルはテントウムシには構わず、方向を変え、花壇の方へ跳んで行きました。「あーよかった。ここなら日陰やし、花もいっぱいやし、ちょうどいいんじゃない」と、まだ、視線はカエルに向けたままつぶやきました。カエルが花壇の中に跳びこみ見えなくなり、ふと地面に視線を移すと、ハエが止まっているのを見つめます。「あーハエいた。もうちょっと早かったらな…」と言いながら、飼育ケースを片付けに保育室へ戻って行きました。

見つけた場所でカエルを逃がしたり、無事に跳んでいくまで見守ったりしていた姿から、しばらく飼育していたことで、カエルに気持ちを寄せていたこと、愛着をもっていたことが伺えます。A児なりに捕まえた責任のようなものを感じていたのでしょうか？まるでカエルに元の生活に戻るようにと言わんばかりに向き合っているように見えました。

一方で、テントウムシやハエはカエルにとってはエサなのですが、A児もエサとしか見ていません。生き物が生きるためには必要なことで、食物連鎖ということを幼児たちは生き物にかかわりながら捉えています。カエルにもテントウムシやハエにも命があり、生きているということに思いを馳せることができればとも思います。

## 未来にフォーカス！！

幼児期の子供たちは、生き物を捕まえて、飼育し、逃がすという一連の過程の中で、いろいろなことを経験しています。この過程の中で感じるいのちへの思いや不思議さ、自然の摂理が、将来、地球上の生き物に気持ちを寄せてかかわり、共に生きていこうとする力につながります。



- ◇ あれやん! つくれるで (4歳)
- ◇ ごみって... (架け橋期6月)

遊びを自分ですすめたり  
もっと楽しくしようとしたり  
いろいろなものに興味をもったり  
知りたいことを調べたり  
社会の出来事に目を向けたり

～自分の内側で行う“考える”ということ、外側に表出される  
“工夫する”ということに着目しています。  
社会や世界で起こっていることを自分ごととして捉える、  
そんな姿につながるように～



## あれやん！ つくれるで！

## 保育エピソード

秋に種まきをしたハツカダイコンが収穫の時期を迎えた時のことです。「どうやってもってかえろうか？」と子供たちに投げかけると、「あれやん！」「つくれるで！」とすぐに返事がかえってきました。1学期、ピーマンを収穫した時に読み終わった新聞でバッグを作って持ち帰ったことを思い出したようです。そのバッグは保護者からも「かわいいバッグだね。」と好評で、受け止めてもらったことを喜んでいたのでした。

「せんせい、しんぶんちょうだい！」と言ってきた子供達に、棚の上に置いてあった古新聞を手渡すと早速バッグを手慣れた様子で作り始めました。以前、A児はバッグが壊れて困っていたのでどうしているのかと気になり目を遣ると、折り目をしっかりつけテープを何重にも貼っているではありませんか。その姿からは、（こんどはこわれないようにつくろう）という思いが伝わってくるようでした。時間をかけてようやく出来上がると、私のところへ晴れやかな笑顔で見せにきました。「いいのがつくれたね。」と頑張りを誇る思いで声をかけると、新聞バッグを両手で大事に胸の前で抱えながらプランター栽培のところまで駆け出していき、ハツカダイコンを引き抜いて洗い、そっと入れていました。

## 未来にフォーカス！！

もっとこうしたいという思いをもって、自分で試行錯誤して進めていくことは探求することのおもしろさを感じていくことです。将来、身近なことから社会へと視野を広げ、様々な事象を自分事として考え、行動していく原動力になります。

## 暮らしにあるものをいかす

## 考察

子供たちにとって、新聞紙は、野菜に優しい素材だということを持ち帰ることで感じていたり、折るとバッグになるという発見があったりし、様々な用途に使うことができる身近なものになっています。

このようなモノの価値を友達や教師と一緒に体感していたことで、A児が新聞バッグが壊れないようにと自分で試行錯誤しながら思いをもって作っていた姿につながったのではないのでしょうか。





かんがえる  
くふうする



## 意見交換

# ごみって…

架け橋期 6月

## 考察

身の回りの物を様々なことに生かそうと知恵を出し合える力は自分の生活を豊かにしていくためにも必要なことですし、社会に目を向け関心をもつことにもつながっていくのではないのでしょうか。分別の仕方を覚えるといったことに移行していく前に、物そのものを見て、考えることの出来る環境が大切ではないかと思えます。どんな物にも再利用の可能性があることに気づける、そんなくらしの中で、物の見方、捉え方の基礎を築くことが幼児期から1年生の架け橋期には求められるのではないかと考えました。

**幼稚園：**「燃える」「燃えない」は幼児の生活経験でわかるかな？という疑問が浮かんだことからゴミ箱を見直しました。使い終わった材料を捨てる時、ちょっと立ち止まって考えられたらいいなと。分けることにゲームのようなおもしろさを感じていたり、「紙だけどのりがついているから“？ボックス”にしよ」と友達に相談していたり、適当に入れていたり…いろいろな姿があります。

**小学校：**必要なくなったものはゴミ箱へ入れることが当たり前になっているからか、掃除時間に落ちている物があるとどう見てもゴミ…というものも担任に届けにくる1年生もいます。落ちていた物は落とし物という感覚なのかもしれませんね。また、給食のデザートカップなど使いたいと思うようで洗って残しておきたがります。4年生でゴミ処理について学んだり、5、6年生になると委員会活動でリサイクルの呼びかけをしたりと社会生活とのつながりやみんな課題に向かって解決していこうとすることを意識した学びが始まります。

**幼稚園：**分けたり、集めたりすることも遊びの一つで教師の働きかけや環境の作り方で物の扱いにも発見があったり、考えるきっかけが生まれたりする良さがあります。紙はよく使うのですが、幼児の扱いやすい大きさなどを優先すると端紙も多く、まだ使えると言って分けておいても、使い切れず…幼児の実感を伴うようなその先の経験を模索していました。ペットボトルキャップなど遊びに使ったあと、小学校の委員さんに届けて、仲立ちをしてもらおうと、社会活動がより身近な経験になりそうです。

## 未来にフォーカス！！

ごみの問題は生きていく上で避けることはできません。架け橋期（5歳児から1年生）では使い終わった物にどのような価値を見出し、どのような行先を選ぶのか、気づいたり考えたりする力を育みたいものです。そのことが、目の前の物の成り立ちやここに至るまでに関わってきた人々へ思いを馳せる力となり、自然の循環や、調和のとれたエネルギー利用を大切にするなど、豊かにくらし人生を生きていくことにつながります。



- ◇ トマトちゃんといっしょに (3歳)
- ◇ ピーマンは苦手でも… (4歳)
- ◇ わたしもやりたい (4歳)
- ◇ カエルのはこ (4歳)
- ◇ 齧られたピーマン、どうする? (5歳)

気持ちをよせたり  
優しくしたり 愛しんだり  
自分にできることを探したり  
誰かのために動いたり  
時には怒りや悲しさを感じたり

～環境にやさしいモノを選ぶ、使うといったことだけでなくモノ  
や状況、そのものに目を向け、気持ちを寄せ、自分の考えに向き  
合ったり、変えたりしていくことを大事にできるように～



# トマトちゃんといっしょに

3歳児I期5月

## 保育エピソード



おはよ!



お水おいしいか?

ごくごく飲んでる



お花見せてあげる

水やりをしながら「おはよ!」「ごくごく飲んでる~」「お水おいしいか?」など自分の言いたいことを話しかけたり、摘んできた花や、砂のご飯をトマト苗の所に置いたりする姿もありました。葉っぱが黄色くなったので私が「元気になって」と言いながら肥料をあげているのを、子供たちが見ていました。すると、肥料が砂と同じように見えたのか、砂場から砂を取ってきて、トマト苗の周りに蒔き始めることもありました。

トマトのためにいいと思うことをしてあげたい、そんな子供の思いが伝わってくる出来事でした。

3歳児が気持ちを寄せる姿から

## 考察

“栽培”というと収穫を目的とするのですが、3歳児はトマトが生長していく過程でその時感じたことを呟いたり、育てていく中で気づきを思わず言いたくなったりするなど、トマトがまるで仲良しであるかのように気持ちを寄せる姿がたくさんありました。

## 未来にフォーカス!!

相手は“人”ではなく“トマト”ではありますが、子供にとってはお友達のような存在。自分なりに気持ちを寄せ、相手のために何かしてあげられることはないかなと、対象を愛おしむ経験は、将来お互いを大事に思い尊重し合う共生へとつながっていきます。こんな心温まる出来事の積み重ねが将来“平和”へとつながっていきそうです。





だいじ



# ピーマンは苦手でも…

4歳児Ⅱ期6月

収穫をめぐって

保育エピソード・その後

## 保育エピソード

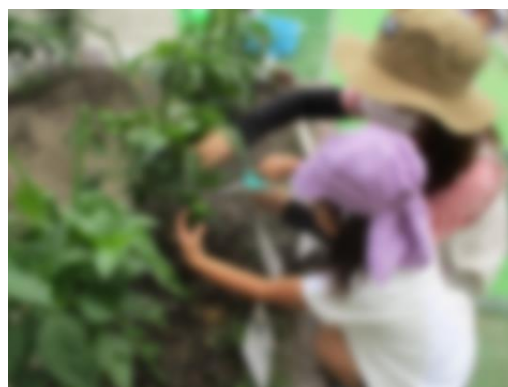
ピーマン苗は短い梅雨にもかかわらず、子供達の水やりのおかげで順調に育ちました。相談の結果、持ち帰ることになったのですが、ピーマンがまだ小さいという私の判断で収穫を先延ばしにした日がありました。「明日にする？」と声をかけるとA児はただ静かに黙ってうなづきました。一日待った翌日に持ち帰ったものの、その様子が気になっていました。

すると、持ち帰った翌日、保護者から「ピーマンは嫌いなんです。」と知らされたのです。あの時のA児は『きれいだからちいさくてもよかったのに』と言いたかったのではないかとハッと気づかされる収穫となりました。



その後、A児の保護者の情報から、最初に持ち帰ったピーマンが食卓に上がった時、「パパ、ママたべてね。」と言いながら家族が食べる様子を嬉しそうに見守っていたことを知りました。

後日、2個目のピーマンを収穫する際には積極的に大きなピーマンを探していたのです。「みんなにたべてもらうから。」と家族に味わってもらおうことを楽しみにしている様子でした。



## 考察

家族のためにと心を寄せる姿から、A児は自分なりの収穫の喜びを見つけられたのではないかと考えました。

育てて味わうことに気をとられて目標やねらいを考えてきたのではないかと、私自身も収穫の在り方について幅広く捉え直すきっかけとなりました。

## 未来にフォーカス！！

たとえ苦手で食べられなくても、自分の手で育てたものを家族が食べてくれたことに安心し、喜びへとつながった経験は、自分を肯定的に捉えるもととなります。

また、将来、人や社会のために働き役に立つ喜びを味わうことへとつながっていきます。

# わたしもやりたい

## 保育エピソード

片付けの時間のこと。使い終わった紙を入れる仕分けのカゴには子供達の手でいろいろな形の紙が集められていました。私とその紙をハサミで切って残せる部分を整えていると、「なにやってるの？」とA児が見ています。「こうやって四角く真っすぐに切っておこうと思って。」と返事をしながらもう一度使える紙を入れる仕分けのカゴに戻していました。A児は「わたしもやりたい。」と隣りで紙を切り始めました。その様子を見ていたB児、C児、D児もハサミを手に集まってきました。三人は細かく切り刻んだり長さ比べをしたりととにかくたくさんの紙を切ることに夢中になっています。そんななか、A児が「そんなにちいさくきったら絵とかかけへんやん。」と言ったのです。その言葉にピタリと手を止めた三人。「なんで？」とB児が聞くと、A児は「まだつかえるやん。」と返事をしました。B児たちは少しの間、A児のしていることを見た後に、次からはゆっくりと慎重に紙を切り始めたのでした。

## 未来にフォーカス！！

幼児期に遊びの中で、モノをじっくりと見たり扱ったりする気持ちや態度は、将来、自分とモノに意識を向け、再利用するなど新たな価値を見出し、行動していく力につながります。

## 遊びから始まる気づき

### 考察

絵を描いたり、形に切ったりした端紙は、遊んだ後にはたくさんできます。保育の中でモノを大事に使おうとする教師の振る舞いは、子供たちのモノに対する意識につながったようでした。

A児は教師のしていることに興味をもち真似を楽しんでいるうちに“まだ使える”という気づきを実感していったのでしょ。そんなA児の気づきは周りの友達とのやりとりの中で広がっていきました。ものを大切にするという行為の出発点はこういった人とかかわりの中で、気付きと楽しさが一緒にあることではないかと感じました。



カエルのはこ 

土に『カエル』！？

## 保育エピソード

フウセンカズラの種取りをした後、ザルいっぱいに剥いた殻があふれかえています。生長を楽しみに一緒に植えたものなので、殻をこのままゴミ袋に入れてしまうのはもったいない気がしました。「いっぱいやね。殻さんかわいそうだな。」と困った顔で言ったのですが、みんなの反応はありません。そこで「穴を掘って入れてみる？ ゴミになるものなんてないんだよ。」と誘ってみました。穴を掘り殻を入れると、とたんに土をかぶせた子供たち。埋めるのも悪くはないのですが、これをきっかけに集める箱として中身も見えるものだと持続性があり、子供にもわかりやすいのではと考え、廃材を再利用してコンポストを作ってみてはどうかと思いつきました。



## 保育エピソード・その後

子供たちと一緒に片付けをしながら花がらや殻を入れていくうちに「カエルのはこにいれよう」「あそこに入れるんやで」と誘いあったり伝えあったりする様子も見られるようになりました。“土にかえる”に語呂合わせした呼び名もあいまって、入れることが面白かったりもしているようです。

## 考察

もったいない気持ちを伝えながら子供の気づきを促したけれど、4歳のこの時期では自然の循環という発想や活動につながるには時期早尚だったようです。目の前の子供たちとやりとりをして、その姿と折り合いをつけながらタイミングよく環境を整える準備をすることが教師として必要なことだと改めて考えさせられました。子供の姿からヒントをもらい提案したコンポストですが、子供が遊びや生活の延長で取り入れていく環境の一つとしては、ちょうどよい箱になっています。



だいじ



## 未来にフォーカス！！

コンポストはたい肥をつくるものですが、今の4歳児にとっては遊んだ後の自然物を入れる箱という捉えのようです。その役割はわからないかもしれないけれど、身近な環境に置いてあるという暮らしづくりの中で目にしたり触れたりしています。

この経験は、将来ものの循環に気づき、ものに向き合って丁寧な暮らしを営む基礎を培っていきます。

# 齧られたピーマン、どうする？

## 保育エピソード

## モノに新しい役割を見つけた子供の発想



カラスに齧られて半分になっているピーマンがありました。A児はそのピーマンの中に指を入れ、中を触りながら「これどうしよう」と言いました。「土入れて、種植えたら、またピーマンできるんじゃない？」と思いついたようで、友達と一緒にピーマンに入れる土を探しに行きました。

Aちゃんはピーマンの中に土を入れ、植木鉢みたいすると水やりもしていました。毎日、水やりをするうちに水の量が多いと土が流れ出すと気づいたので、ある日からは材料棚にあったストローを使ってそっと水をかけるようになりました。それでも、ピーマンは萎れて、形が崩れていき、明日から夏休みという日を迎えました。

子供達と夏休み前の片付けをしながら、萎れてきたピーマンをどうしたらいいか私は悩んでいました。このままにはおけないと心を決め、思いきってAちゃんに「どうする？」と声をかけました。Aちゃんは「捨てる」と言われているのでしょうか、私にくっついて下を向いています。どうかしたほうがいいのはわかるけど、「捨てる」とは言いたくない…そんなAちゃんの気持ちが伝わってくるようでした。私も「捨てる」と言うのはなんだか違う気がしてきて、何も言えなくなりました。周りの友達も黙っていました。ふと思いついて、「森のコンポストにいれるっていうのは？」と聞いてみると、うつむいていたAちゃんが、ぱっと顔を上げ「そうする。」と言いました。周りにいた友達もほっとした様子です。そして、そのピーマンをもって森のコンポストへと向かったのです。

### 考察

齧られたピーマンに植木鉢という新しい役割を作った子供達。用途に合わせて選ぶということは、これから体験し学んでいくのだと思いますが、固定概念に捉われないという力をのびのび発揮していると思いました。このピーマンの最後はコンポストの中。土に還り、次の植物が生える一部になることをAちゃんのはっきりと期待していたわけではないのですが、「捨てる」とは違うと感じたのだと思います。栽培体験で出会ういろいろな出来事を大きな循環という枠組みの中で捉えると、子ども達の自由な発想がモノに新たな役割を生むこともあるのだと感じました。

## 未来にフォーカス！！

食べられなくなったからゴミとして捨てるのではなく、コンポストという行先があるという体験は、自然と調和し、自然の循環を生かすことにつながっています。限りある資源を生かしこれからもずっとくらししていくこと＝持続可能な社会を作ることにつながります。







- ◇ だってこのお花好きだから（4歳）
- ◇ チョウさん、しんじゃう（4歳）
- ◇ わたしの食べごろ（5歳）

自分と違う思いにふれたり  
いろいろなやり方を知ったり  
違うことに気づいたり  
同じがうれしかったり  
違うことを楽しんだり  
そして自分がわかったり

～モノ、生き物を含む他者との違いを肯定的に捉えることは、相手も自分も大事で、尊重すべき存在だと思うことにつながります～

# だって、このお花が好きだから

## 保育エピソード

ダンゴムシはお花を食べる??

## 考察

毎朝ダンゴムシを握りしめ登園してくるA児と一緒に、ある日お家づくりをしました。私はダンゴムシがクレサンセマムの花びらを食べるということを最近知り、「ダンゴムシさん、この白いお花が好きなんやって」と言うと、A児は一緒になって飼育ケースに入れました。翌朝、花びらはダンゴムシがすっかり食べており、登園してきたA児は花のなくなった飼育ケースをじっと見ていました。園庭に出て遊ぶ時間になると、A児は花壇の前でしゃがんでダンゴムシ探しをしていました。様子を見に行くと、片手でクレサンセマムの花の茎を持ち上げ集めていました。私が「うわー、いっぱいいるやん」と言うと、A児は「だって、このおはながすきだから（ここにいっぱいいるの）」と返事をしました。

A児は教師からクレサンセマムの花を食べると聞きケースに入れたが、本当に自分が摘んだものが食べてなくなったのを見て「この花はダンゴムシにとって食べ物」と知ったのだろう。その出来事が、A児の眼差しや気持ちの寄せ方を変えていき、やがて週末には多めに花を入れたり、弱っているように見えると逃がしたりと行動を変えていった。虫ではあるが他者の視点にたって物事を考えるきっかけになったといえる。

## 未来にフォーカス!!

幼児は自然に触れ、心揺れる体験を通して身近な事象に関心をもつと共に、愛着や畏敬の念を抱くようになります。虫と触れて生活する中で、しだいに気持ちを寄せたり愛着をもってかかわったりしていくことが、人とのかわりにおいて大切な“違いもまず受けとめる”という、多様性の素地を育てていくのではないかと思います。



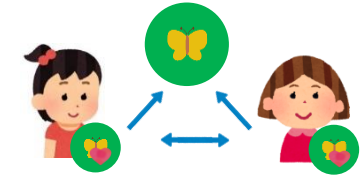
ちがい



# チョウさん、しんじょう

## 保育エピソード

4歳児が友達の思いとぶつかる姿から



## 考察

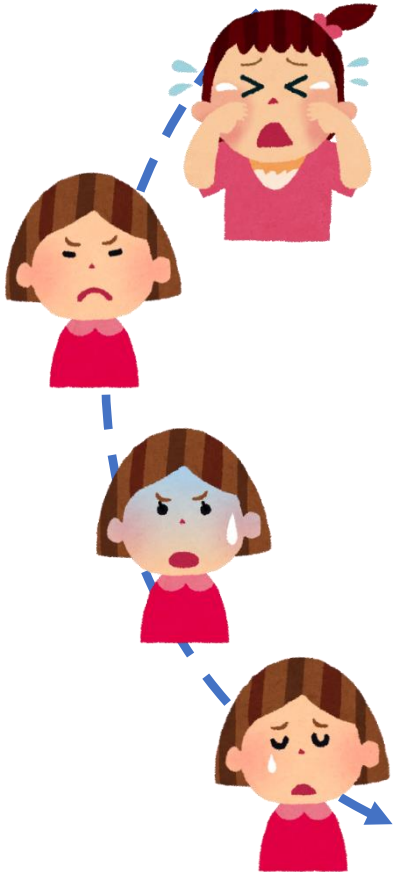
B児は素直にチョウをかわいそうに思い、A児の気持ちには考え及ばなかったようです。B児の涙の訳はB児にしかわかりませんが、教師を介し自分とは違う思いに触れ、心が大きく揺さぶられたのだと思います。しかし、A児・B児どちらの心にも、その根底には「チョウが好き」という同じ思いがあり、そうした「同じ」に触れながら「違い」に気付いていくことが大切であると考えました。

「チョウ捕まえた」と喜んでいたらA児が泣いています。他の子供たちが「Bちゃんがチョウ逃がさした」と言うのでたずねると、「チョウさんしんじょう」と語気を強めて応えてくれました。虫かごの中には花が1つあり、私は「このままだとチョウさん死んじゃうと思ったんだね」と声をかけると、B児は力強く頷きました。B児のチョウを思う気持ちを感じながら、でもA児の気持ちにも気付いてほしくて、私は「もしBちゃんが、自分でがんばって捕まえたチョウチョウ。お友達が勝手に逃がさしたらどんな思いになるかな…」と声をかけました。B児は黙って聞いていました。私はどちらも責められるべきではないと、2人を誘い保育室に入りました。やがてB児も声をあげ泣き出しました。

## 未来にフォーカス！！

毎日続く「くらし」の中で、子供たちは「もっとおもしろくしたい」「一緒に楽しみたい」などいろいろな願いをもっています。そうした「共生」する生活の中で、「違いに触れる、知ることにつながる、受け止め合う経験」を通して感じる、豊かさや楽しさを存分に体験することが、将来様々な多様性を受け入れる素地になると願っています。

ちがい



# わたしの食べごろ

5歳児Ⅱ期6月

栽培体験ってステキ

## 保育エピソード

## 考察

生長したピーマンの数や大きさの違いを比較している姿は、“ちがい”を特徴（個性）として捉えながら、よさとして見ていることが伺えます。肯定的な見方は友達と共有され、収穫の楽しみが倍増しているようでした。

子供にとっての“食べごろ”とは、栽培物の生長と自分の気持ち、様々な状況を見つめて決めたことのように。友達とのやりとりの中で、“わたしはこうする”と、自分ごととして捉えている姿を大事にしたいです。

大きく実ったものを収穫するというような、成功体験をさせたいと思うところがあるのですが、いろいろな事象に出会ったときに、教師や友達と見方を変えていく体験こそ、幼児期には共有していきたいことではないでしょうか。

布製のプランターを使ったピーマンの栽培活動。水やりをしながら、友達と互いのピーマンについて「〇〇くんのは、ちっちゃいけど、多いね。〇〇ちゃんのは、大きいけど少ない」等話していることがありました。大きくても小さくてもどれも大事なピーマンというふうに感じているのでしょうか。

そろそろ収穫できる時期になり、子供たちには食べごろ（採れごろ）は自分で決めようと話をしていました。ピーマンは苦手だから・・・と、収穫することに葛藤していたり、大きくなるのを楽しみにして、採るのを待っていたり、天気予報を手掛かりにしていたり、“週末だから採ろう”とか、“休み明けまで置いておこう”と自分なりに数日間の生長を見通していたりする姿もありました。大きくなるのを待ち続けて、赤くなったピーマンを驚きと味への興味で収穫している子もいました。

ちがい



未来にフォーカス！！

様々な自然の事象に触れ、いろいろな見方や考え方に触れていく経験は、将来、自分のことも相手のことも知っていきながら、多様性を受け入れていくことにつながります。



- ✧ 友達と楽しみたい（4歳）
- ✧ アブラムシどこにおるん？（5歳）
- ✧ どうやって採る？（5歳）
- ✧ セミ…どうしよう（5歳）
- ✧ 友達と一緒に身体を動かすことについて（架け橋期9月）

友達と一緒にたのしかったり

遊びたいけど遊べなかったり

力を合わせたり

意気投合したり

1人より2人って感じたり

みんなのステキを感じたり

～身近で関わりたいと思える存在である友達。

自分の思うようにいかないことがあっても、一緒にいたいと

願い、葛藤を経験し、次第にクラスや幼稚園という集団の中

の自分を意識して、ステキを感じていきます～



ともだち



# 友達と楽しみたい

## 保育エピソード

4歳児Ⅳ期11月

友達との多様な楽しみに触れる中で…

一斉活動前、みんなが集まるまで遊びながら待つことにしました。ピアノの『タントントン…』という音で、子供たちは「じゃんけんあそびや！」とペアを作り始めます。2回ほど遊んでいるうちに支度をしていた幼児も集まってきました。間奏でペアを変えるのがいつもの流れですが、A児が「みんなきて！」と他児を誘い大きな輪を作ろうとします。私は友達と一緒に楽しい時期だなあとその様子を微笑ましく見ていました。A児は「あっ！Bちゃんも入って！」と声をかけますが、B児は「2人じゃないとダメなんだよ！」と強い口調でその誘いを断り、C児とペアになりました。

じゃんけんが終わり次の間奏が始まると、A児だけでなく他児も「みんなきて！」と輪がどんどん大きくなります。D児が笑いながら「Cちゃんも！Bちゃんも！」と声をかけます。C児がB児の手をつないだまま輪に入り、B児はすんなりとその流れにのると、反対側の他児と笑いながら手をつなぐのでした。

## 考察

B児はいつもと違うやり方に初めは注意するような口調でいたが、その輪は子供たちの期待や楽しみをも抱えるようにどんどん大きくなっていきました。B児はC児に連れられたことがきっかけで、みんなの輪を作っていくおもしろさを受け止め、考えを柔軟に変え楽しみ方を変えたのでしょうか。

## 未来にフォーカス！！

幼稚園という共生する社会にはみんなが楽しむための決まりや約束があり、みんながいるからこそ楽しみ方は多様にあります。同時に「友達と楽しみたい」という思いもあるからこそ、遊びの中で幼児期の子供たちは柔軟に、みんなが納得する合意を形成していくのでしょうか。これは他者と楽しさを共有し、よりよいコミュニティを形成しながら、豊かに人生を生きていくことにつながるのではないのでしょうか。



# アブラムシどこにおるん？



ともだち



## 保育エピソード

いつも仲良しの友達と一緒に行動することが多いA児が、めずらしく一人で「アブラムシどこにおるん？」と聞きにきました。同じ学年とはいえ、違うクラスの担任の私にわざわざ聞きに来たことに少し驚き、でもうれしくて、「アブラムシいるかな？」と話しながら、ソラマメの場所に案内しました。ソラマメにはアブラムシがたくさんついていたのですが、Aちゃんは採ろうとしません。私は（違う部分を見ているのかな？アブラムシがわからないのかな？）と思い、「これ、アブラムシやで」と伝えてみました。するとAちゃんは私が指した場所をじっと見て頷きました。でも、自分では採ろうとしないので、私が枝を折って「はい」と渡しました。Aちゃんは「ありがとう」と言って受け取り、カエルの世話をしている仲良しのBちゃん達のところへ戻って行きました。

そのカエルは10日前にBちゃんが捕まえたカエルです。思い返してみると、捕まえた日、夢中でケースの中のカエルを見ているBちゃんを友達が囲み、Aちゃんも友達の背中ごしにカエルをのぞきこんでいました。Bちゃんが「食べ物はアブラムシでいい」と言うので、カエルを見ることに忙しそうな子供達に変わり、私がアブラムシのぎっしりついたソラマメの枝を採ってきてBちゃんに渡した…ということがありました。

## 未来にフォーカス！！

友達に刺激を受けつつ、好きなこと、嫌いなこと、出来ること、出来ないこと、面白そうなこと、知らないこと…いろいろなことに向き合い、興味や関心を広げていく経験は多様な人々が生きる社会の中で自分の力を発揮し、支え合いながら生きていくことにつながります。

暮らしの中で友達から受ける刺激

考察

あまり虫を触れないAちゃんですが、カエルの世話をしている仲良しの友達に刺激を受けたのではないかと思います。

幼児期に暮らしの中で友達から受ける刺激は無理に押し付けられるようなものではないので、苦手なことに関しても頑なにならず、自分のやり方やペースで興味を広げていけるように思います。Aちゃんはゆるやかだけど刺激溢れる子供の世界で、「自分に出来ること」「自分がしたいこと」「友達の役に立つこと」「カエルのためになること」のどれもを経験しています。Aちゃんの興味や関心がこれから、どのように広がっていくのか楽しみです。



# どうやって 採る？

きゅうりの収穫をめぐって

## 保育エピソード

きゅうりの畑の前で3人が横並びに座り込んでいました。あまりかかわって遊ぶことがない3人だったので、気になりそばに行くと、目の前のきゅうりを誰が採るか、それをどうやって決めるかという話をしていたのです。3人でじゃんけんをするが決まらず、A児が「じゃあ、2人ずつじゃんけんにしよ、まず、AとBちゃん、そして、AとCちゃん、そうしよ」と2人を説得している様子でした。A児の提案に2人も何となくそうしようという雰囲気になりました。結局、A児がじゃんけんに勝ち、見ていたきゅうりはA児が採ることになりました。それでも、B児とC児はすぐにその場から離れませんでした。少しして、B児が「これでもいいかな」と他のきゅうりを見つけると、C児も他を探して収穫していました。また、A児は2人がきゅうりを採り終わるまで待っており、3人できゅうりを持って保育室に戻っていきました。

## 考察

個人植えではなく、みんなのきゅうりだからこそ、何とかうまく分けようとしているようでした。A児は、じゃんけんで決めるという方法を提案し、見つけたきゅうりを採ることができましたが、B児とC児の採りたいという思いを肌で感じ、気にかけて待っていたようでした。2人が無事にきゅうりを収穫できたことを、言葉にはしていませんが、ホッとしたのかもかもしれません。

B児とC児は、最初に欲しかったきゅうりを採ることはできませんでしたが、3人で相談していろいろな思いを抱きながら収穫したので、前向きなあきらめにつながったのではないかと思います。

## 未来にフォーカス！！

人とのかかわりの中で、思いを交わし、自分のことも相手のことも知りながら成長しています。そのことが、互いの思いや考えを受け止め合いながら、よりよい方法を創造し、他者と共生していくことにつながります。





# セミ・・・どうしよう

5歳児Ⅱ期7月

友達と思いを交わして

## 保育エピソード

セミが死んでいるのを見つけた子供たち。セミに損傷がないためか、その反応は、「死んでいるよね?」「…たぶん、だっ  
て動かないもん」という感じで、手に乗せて2人で話しながらセ  
ミをじっくりと見ており、その状況を受け止めようとしている  
感じでした。でも、何とかしなければということになり、園庭  
に向かったり、図鑑でセミのことを探したり・・・途中で友達  
に今の現状を話したりしながら、「どうしよう・・・」という  
思いでいっぱいの様子でした。

その日はそのまま置いておくことになり、翌日、セミと2人  
の様子を見ていた子も加わり、3人で園庭へ向かいました。セミ  
を箱の中に入れて持ち運び、小枝を集めてセミのためにお家を  
作ってみます…しばらくして何かきっかけが必要かなと思い、  
「セミってどこに止まっているんだっけ?」と尋ねてみました。  
ああ!という感じで3人が園庭のサクラの木のそばへ行き、踏ま  
れにくそうな場所を探して埋めることになりました。

## 未来にフォーカス!!

友達と一緒に心を揺り動かして向き合ってきた経験は、これか  
ら多様なモノや環境に出会っていく際に、人と協同して活動し  
たり、自分で考えて行動したりすることにつながります。

## 考察

虫には興味はあるものの、いつも虫とり  
をしているわけではなく、触るのも苦手な  
子供たちが、友達と思いを交わしていくこ  
とで、死んでいるセミに向き合い、自分た  
ちが知っていること、できることを考えよ  
うとしていました。

死んだ虫は土に埋めるということが、そ  
うするものとして、パターン化しやすいの  
ですが、友達と一緒にじっくりと見たり、  
触ったりしていたからこそ、そういう発想  
に直結しなくても、”死んでいる”とい  
うことを実感したり、命の尊厳のようなもの  
を感じていたのではないのでしょうか。



ともだち





# 友達と一緒に身体を動かすことについて

架け橋期 9月

## 意見交換

### ともだち



**幼稚園：**おひさまタイムはみんなで身体を動かす時間。好きな遊びの時間だけでは補いきれない運動や集団で楽しめる運動遊びなどします。朝一番に身体を動かし、しっかり目覚めた状態で、一日の活動に向かえるようにとの願いもあり、取り組んでいます。リレーは一人ひとりが思い切り走る楽しさとか気持ち良さを感じるということをまず大切にしています。もっと早くなりたいと帰ってからお家の人と自主練しているという子どもや、こういう走りの方が早いと言ってクラウチングスタートのポーズやアニメの登場人物の走り方をしたりする子どももいます。大人が見ると遅くなるのでは…と思うのですが、その子は本気でその走り方が速いと思ってやっていました。

**小学校：**1年生の運動会でリレーはしないのですが、レクリエーションとしてリレーをすることも。リレーと言うと「やったー」と喜びます。カリキュラムとしてはいろいろな走り方（ジグザク、折り返しとか）を試すことをします。

**幼稚園：**リレーの取り組みの前半と後半では子供達の走り方や姿など変わってきます。「なんで遅いんだよ！」と友達に対して怒っていた子供が怒らなくなったり、本人は一生懸命なんだけど歩いているような走り方だった子どもの手足の動かし方がスムーズになって、走ってる！という感じになったりします。友達の走りを見る時間が必然的に生まれるリレーの良さかもしれません。

**小学校：**学習でも友達と一緒に身体を動かすことで、仲間の動きを真似たり、競ったりするので、いろいろな動きを経験することにつながり、身体を動かすことを楽しみながら、学習の楽しさを味わい、学習を中心とした生活に慣れていきます。その中で友達との自然な関わりも生まれていきます。

**幼稚園：**リレーは勝敗を競うからこそ、勝つための工夫や葛藤の経験ができると考えがちですが、大人の感覚の勝負を持ち込まなくても、子ども達ならではの工夫や気づき、気持ちの成長があるとわかり、子ども達のリレーの楽しみ方をもっと大切にしたいと感じているところです。

## 未来にフォーカス！！

友達と一緒に身体を動かすことの楽しさは、社会という集団の中で協働して生きていくための土台となる。他者の動作や考えを取り入れ、自分の成長や楽しさを実感することは、自分も他者も尊重し、共により良い社会を築いていくことにつながるだろう。

## 考察

取り組みや楽しみ方が似ているのは、5歳児と1年生では発達に大きな違いがないということだろう。架け橋期の子供たちは友達と一緒に身体を動かすことで友達の動きを自然に真似たり、動くこと、走ること、そのものを楽しんだりする感覚に溢れている。それに加え、集団であることの面白さ、集団の中にいる自分がうれしいという感覚が飛躍的に育つ時期だからこそ、リレーを喜ぶのではないだろうか。



- ◇ やっぱり着替えるわ（3歳）
- ◇ まだ、追いつけへんからな（5歳）
- ◇ 見て、こんなに汚れた！（5歳）

思う存分遊んだり

身体の感覚を獲得していったり

清潔に気持ちよく暮らしたり

けがや病気から身を守ったり

食べ物について考えたり

食べるって有難いなって感じたり

～あえて、元気という言葉を使わずに、元気がない自分や友達に  
向き合う中で、からだや生きることに對する多様な見方や捉え方が  
できるようにとの願いを込めました～



からだ



# やっぱり着替えるわ

自分で感じて・・・

考察

## 保育エピソード

夏休み明け、水遊びをして服が濡れたA児は友達の中で着替えはじめていました。Tシャツを着替え、その後「う～ん…」と言いながらしばらくズボンを触っていました。私が他児の着替えを手伝っていると「先生ここ（ズボン）触って」と声をかけてきました。私はズボンを触り「ちょっと濡れているね」と声をかけると「濡れてるな！やっぱり着替るわ」と言ってすぐに着替え始めました。これまでは教師に手伝ってもらいながら、着替えに取り組んできたA児でしたが、「濡れてるね」と返した一言で自ら着替えだしたことに凄い！と感心しました。着替えが終わった後に改めて「気持ちわるかったの？」と聞くと「ちょっと」と応えてくれました。

「先生触って」と言いに来たのは、自分の感じた湿り気確かめたかったのでしょうか。着替えたくなるほど濡れているのか、すぐに乾くぐらいなのか、A児は自分で考えようとしていました。私が「濡れているね」と応えたことで「やっぱり着替えよう」と判断したようです。暑い季節だったことと、湿り具合がわずかだったこともあり、すぐに着替えようと言わずに見守ることが出来ました。

教師の言葉に支えられA児が自ら着替えたことは自分で決めた喜び、満足感へとつながったと思います。子供たち一人一人が自ら行動しようとする気持ちを引き出せるように関わっていきたいと思います。

## 未来にフォーカス！！

服が濡れたから着替えるというのは日常のありふれた行為かもしれませんが、だからこそ、日々積み重ねていくことが必要です。この積み重ねで得られた「感じて、行動しようとする力」は、将来、自分の体への関心、健康であろうとする意識につながります。

# まだ、追いつけへんからな



からだ



## 保育エピソード

年長組、年中組の子供達と一緒にサッカーをしているどんぐり広場（園庭）でのことです。

A児の蹴ったボールがエコプランターに植えたピーマンの方へ転がっていきました。強い勢いではなかったので、私は「あ〜」と言いながら、安心して見ていたのですが、Aちゃんは真剣に走り、ピーマンの直前でボールに追いつくと、片足でかっこよくボールを止めました。私が「すごい！ボールに追いついたなあ！ピーマン大丈夫やったな！」と声をかけると、Aちゃんは息を切らしながら、にこにこ顔で振り返り、「年中さんはな、止まれへんのや。ほんでな、ピーマンに（ボール）当たる時あるけどな」と言いました。「そうなん、年中さんの蹴ったボール、ピーマンに当たる時があるんや」と私が言うと、Aちゃんは「ボールにな、まだ追いつけへんからな、仕方ないんや」と言います。その言い方がなんだか得意気で、ほほえましくて「そうかあ、年中さんは仕方ないんやな」と、Aちゃんの言葉を繰り返しました。Aちゃんは笑って「そ、仕方ない」と応え、ボールを蹴りながら、サッカーゴールに向かって走っていきました。



## 未来にフォーカス！！

いろいろな友達と思い切り身体を動かして遊び、人との関係の中で成長していく幼児期の経験は、自他へのまなざしを温かなものにし、自己肯定感を高めます。その積み重ねが心身ともに健やかに生きていくことにつながります。

異年齢の友達へのまなざし

考察

「仕方ない」と言いながら「『まだ』追いつけへんから」と、相手の力量を押し量るような言葉があったのは、ボールに追いつき、大切なピーマンを守れたという誇らしさを味わったからではないかと思います。「守れた」という行為に、年中の時より成長している自分を感じたのかもしれませんが、けれど、年上とは言っても年中さんとは1年（誕生日によっては数か月）違うだけです。身体を使って思い切り遊ぶ中では対等な遊び相手になることもあります。学年を超えていろいろな友達が思い思いに遊び、出会う幼稚園の園庭。だからこそ、身体感覚や心の成長があります。



# 見て、こんなに汚れた！

5歳児Ⅲ期9月

気持ちと体の心地よさ

考察

## 保育エピソード

からだ



気持ちいい～



気持ちいい～

「先生、裸足になっていい～？」と聞きながら、もう靴を脱ぎ、バケツで水を流し、足を浸している子供たち。「気持ちいい～」と言い合い、笑顔が絶えません。前日にずっと砂を掘っていて、中から水が染み出してくるという現象にであった子供たち。今日も砂場で一緒に遊ぼうと約束していたのかもしれませんが、あまりにもうれしそうな様子にこちらもうれしくなってきたのですが、日差しがあるとは言え、少し肌寒いかとも感じられる日。私は思わず「冷たくないの？」と聞いてしまいました。すると、A児はすかさず「冷たいで、だから気持ちいいやん！」なんてあたりまえのことを聞くの？と言わんばかりの笑顔。自分の感覚を信じて疑わないその様子に妙に納得させられると共に、この気持ちよさがわからないなんて！どういうこと？とあきれられたようにも感じ、「そっか、冷たいから気持ちいいんや」と応えるしかありませんでした。靴を履いたままの私にも、冷たい水に足を浸した時の気持ちよさが伝わってくるような出来事でした。

思う存分遊んだあと、「見て、こんなに汚れた～」と友達と言い合いながら着替える顔には笑顔が溢れていました。遊んだことの証であるかのように泥はねを見せ合う姿から、汚れて着替えることに誇らしさを感じているような、そんな印象を受けるほど、清々しい表情でした。

この時期の子供たちは自分で着替える技術も、汚れたら着替えるという意識もあり、着替えていることそのものは当たり前前の風景です。しかし、そこに印象に残るほどの誇らしさを感じさせる姿があったのは、この汚れの理由が「気持ち良さを十分感じて遊んだ」「遊ぶことも着替えることも自分達で選び、進めている」からだったのではないかと考えます。自分達が主体となって生活することの大切さがわかりました。

## 未来にフォーカス！！

思い切り遊んで充実感を味わい、着替えてすっきりし、また遊びに向かっていく力、友達と一緒に自分達で生活のサイクルを進めていく力を幼稚園では育もうとしています。心身ともに健康な暮らしを営み、他者と共によりよく生きようとする力はこういった経験の積み重ねによって蓄えられるのではないのでしょうか。

令和5年3月31日発行

滋賀大学教育学部附属幼稚園

〒520-0817 滋賀県大津市昭和町10-3

TEL : 077-527-5257

FAX : 077-527-5262

Mail : shiga-fuyou@edu.shiga-u.ac.jp